

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

指導観の違いを考える

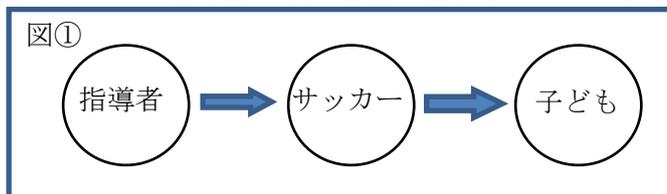
先日、教え子たちの同窓会にお呼ばれして旧交を温めてきた。集まったのは、私が20代の新米小学校教師だったころのサッカー部の子ども達だ。その当時の我がサッカー部の目標は市内優勝すること。子ども達は優勝するためにひたすら練習した。いや、子ども達以上に私が優勝させたかった。優勝以外は価値がないとさえ思っていた。正しくは優勝させるためひたすら練習させたが近い。まだ少年サッカー指導の黎明期の頃。試行錯誤しつつ行きついたのは、華麗な個人技とボールを奪い取る体入れ、走り負けないこと、そして試合では気合で負けないこと。試合中の指示は、叱咤叱責激励叱咤叱責の繰り返しだった。

およそ30年前の、今とは真逆ともいえる指導に耐えた子ども達は、今、サッカーを楽しもうと思えばそこそこ楽しめる子たちだ。サッカーに関わることで飯を食っている者も少なからずいる。しかし、同窓会の最後のスピーチで子ども達に詫びた。

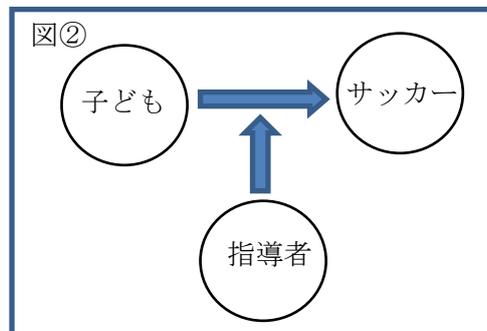
「あの時の私は余にも未熟過ぎた。今の私の指導観であの時の君たちを育てたら、もっともっと上手になっていたかもしれない。」

そのころの私の指導観は、私の考える通りにプレーできれば必ず勝てる、だからやれ！いうとおりに練習しろ！だった。赴任して何年か後に市内優勝してからは益々磨きがかかってしまった。このころの指導観から抜け出るのに、かなり時間がかかったのを覚えている。

昔と今の私の指導観の違いを図式化すると以下のようなになる。



図①は、サッカーを子どもに教えるのは指導者という指導観。子どもはサッカーを知らないのだから、教えなければわかったりできるようになったりはしないと考えるもの。指導者が技術や戦術を一方向的に教え込むことで強くなり、勝てるという指導観。



図②は、子どもはサッカーに向かっていくもの、指導者はそれをサポートする存在という指導観。子どもはサッカーというスポーツに関わり、自分自身の力でわかったりできるようになったり、ゲームに勝ちたいと思ひ努力するようになったりするもの、そのための必要最低限の適切なアドバイスをすることが指導者の役割。子どもが勝利のために問題解決をしていくように育てていくという指導観。

先週の日曜日、自宅近くの中学校の前を通りかかったところ中学生がサッカーのゲームをしているのが見えた。近隣の中学生はどんなサッカーをするのかなと校門をくぐりグラウンドに近づいてみた。中学生たちは黙々とボールを追いかけている。なぜかほとんど無言で。理由がすぐにわかった。聞こえてくるのは両チームベンチからの聞くに堪えない罵声だった。少しミスするたびに喧しい叱責が続く。私は気分が悪くなって校門を後にした。「私も30年前こうだったに違いない。」と思ったら自己嫌悪感でいっぱいになり、気分が悪くなってしまったのである。

私の昔と今の指導観の違い（図①と図②の違い）について、皆様にも考えていただくと幸いです。

「委員長通信」へのご意見ご質問は、FAXにて、四種委員会事務所までお願いいたします。 FAX 047-324-3207